

入学前学習における、同時中継型スクーリングの実施とその効果

國弘保明^{*1} 大始良義将^{*2} 西脇藍^{*1} 福井夕希子^{*1}
門利知美^{*1} 福島康弘^{*1} 宮川健^{*1}

要 約

川崎医療福祉大学では入学者を対象として、e-learning型入学前学習「Kラーニング」を実施している。これにともない、22年度入学者を対象にオンラインスクーリング「ウォーミングアップミーティング」を実施した。オンライン型のスクーリングは本学初の試みであったが、リアルタイムで実施し、チャットで双方性を確保したこともあり、入学者からは好評を得た。その一方で、入学者からは入学予定学科の教員の登場を願う声も多い。入学前学習として基礎的・汎用的な内容を扱いつつ、いかに入学後の専門的な学びをイメージさせることができるかが、今後の入学前学習の課題である。

1. 緒言

近年、私立大学入試において、専願入試区分による早期での学生確保の傾向が強まっている。本学においても、総合型選抜や学校推薦型選抜における入学者数が数多くを占める。このように、早期に入学が決定した学生に対して、大学がこれまで以上に学力やモチベーションの面でサポートをすることが求められている。いわゆる「入学前学習」の一般化である。

2000年11月の大学審議会答申「大学入試の改善について」¹⁾では、アドミッション・オフィス入試のような新しい形の選抜方法に対して、いくつかの提言を行っている。そのうちのひとつ「(4) 高校生との相互のコミュニケーションを重視するものであること」の項には以下のようにある。「入学決定後も必要に応じて、入学前に行っておくべき学習準備等についてのアドバイスをしたり具体的な課題を課したりするなど、合格者に対する丁寧なケアを行うことが求められる。また、このような大学入学前の学習準備等の取組を行う場合には、高等学校と密接に連携協力しながら、高等学校での学習と関連付けつつ行うことも求められる。」すなわち、入学前

学習は20年以上前から言及されてきたことになる。

本学では従来から、国語・英語・情報の分野において基礎的な内容を入学前学習として取扱い、これに加えて学科独自の課題も入学前学習として取り扱ってきた。これをより体系的に、学習範囲を広げて行うべく、2020年度の入学者を対象にe-learning教材としての入学前学習「Kラーニング」を採用した。この取り組みは対象学科や枠組みを変更しながら、現在まで続いている。

本稿では、Kラーニングに付属する形で実施してきたスクーリングについて、教育実践の観点から述べる。論じる対象は主に、2022年度に実施したオンライン形式のスクーリング「ウォーミングアップミーティング」であるが、その前史として2020年度の入学者を対象にしたスクーリングについても言及する。

2. 入学前学習とスクーリング

2.1 Kラーニングの背景

入学前学習の必要性が生じた原因について、椋本と谷川²⁾は以下の3点を指摘している。すなわち、①高等教育の量的規模の拡大、②高校教育と高等教

*1 川崎医療福祉大学 総合教育センター

*2 川崎医療福祉大学 医療技術学部 臨床工学科

(連絡先) 國弘保明 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: kunihiro@mw.kawasaki-m.ac.jp

育のギャップ, ③入試方法の改善と入学前準備のための教育の必要性である。このうち, 本学の入学前学習に大きく該当するものは主に①と③だと考えられる。つまり, 国全体で少子化が進む一方で大学の入学定員は増加し, いわゆる「大学の全入化」時代を迎えたことにより, 入学者の確保もより早期に行われるようになったことである。入学者が早期に決まることは, 結果として入学者の学力が必ずしも十分でないことやモチベーションの低下にもつながりかねない。

本学の K ラーニングは, このような背景をもとに着想された。先述の通り, 当時, 英語・国語・情報の分野の基礎的な内容, 学科独自の課題にさらに積み上げる形で K ラーニングが構想されたのは, より補足的な内容としての入学前学習が求められたことを意味する。繰り返しの効く e-learning で, ドリル形式で基礎的な学習内容を取り扱う。これにより, 学習習慣の定着と基礎学力の向上を狙ったものである。

2.2 K ラーニング開始当初に考えた, スクーリングの必要性

ただ, 機械的な学習では学習のモチベーション, ひいては入学に対するモチベーションが向上しないことが心配される。また, 学力に不安を抱える入学者にやみくもに学習を求めても, その成果は期待できない。

本学は医療福祉分野において, 卒業時に専門的な資格取得を目指している。そのためには学力を身につけることは当然であるが, 卒業までの4年間, ひいては卒業後に専門職として働くことを可能とする, 継続して学習する力を育てることが必要である。

中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ³⁾」は, 大学教育の直面する大きな目標として, 将来予測が困難になっている今の時代を生きる若者や学生の「生涯学び続け, どんな環境においても“答えのない問題”に最善解を導くことができる能力」を育成することを挙げている。

「答えのある問題」を提示するだけでは, 継続し

て学習する力の育成はおぼつかない。学習することの意義を説き, どのように学習するのかを具体的に語る必要がある。入学者として4月から学ぶキャンパスを訪れ, 大学の教員や, 同じく入学する仲間達と顔を合わせる。これも学習へのモチベーションを上げる材料となる。2020年度の対象者に郵送したスクーリングへの案内文書には以下のようにある。「遠方の方など, 参加は必須ではありません。不参加による, 入学後の不都合等も生じません。しかしながら, 間近に迫った大学での学びに対するモチベーションを上げる絶好の機会です。可能な方はぜひご参加ください。」この文言は上述の意気込みを示したものである。

2.3 2020年度入学者を対象とした K ラーニング

2020年度より K ラーニングは開始された。K ラーニングは基礎的な学習内容を, 問題演習形式で復習する e-learning 教材である。入学前学習として初めて e-learning 教材を用いることもあり, 1学部4学科, 合計100名程度を対象として小規模にスタートした。対象科目は英語・国語・数学であった。まず初めに3科目50分間の基礎学力テスト①を受験し, その後, 約3ヶ月間 e-learning を行う。教材は3回に分けて締切を設ける。進捗が芳しくない学生には大学から連絡を行い, また, 途中で学生宅に実施状況を送付するなど, 大学の教員が入学者を気にかけている姿を見せ, 学習を喚起する。学習の締めくくりには基礎学力テスト②を実施する。このような K ラーニングの基本的なデザインは, この開始年度に確立したものである。

この年のスクーリングの内容は以下のようなものだった。当時のスケジュールを示す。

冒頭の「[K ラーニング]説明, 「基礎学力テスト①」実施」は, 入学前学習 K ラーニングのログイン方法等, 操作について説明したものである。また, コンピュータ教室において, K ラーニングの最初に行われる50分間のテスト「基礎学力テスト①」を実施した。

「入学前に行ってほしい学習について」は, 英語・国語・情報の各分野について, 学習の必要性と, 入

表1 2020年度入学者を対象としたスクーリングのスケジュール

時間	内容
9:30~11:00	「Kラーニング」説明, 「基礎学力テスト①」実施
11:00~11:15	休憩
11:15~12:20	「入学前に行なってほしい学習について」説明
12:20~12:35	学科からのアナウンス (対象4学科中, 2学科で実施)

学までにどのような学習を行うべきかを論じた。これに加えて、大学での学習の意義と継続的な学習が必要なことについてデータとともに論じた。「学科からのアナウンス」は予め希望があった2学科がそれぞれ集まり、学科の入学前学習の連絡等を行った。

初めての試みであったが、入学前スクーリングは好評のうちに幕を閉じた。参加は必須のものではなかったにもかかわらず、中国地方以外からの参加者もあった。スクーリング終了後、同じ学科の入学者が集まり、懇談している様子も印象的であった。

2.4 2021年度入学者を対象としたKラーニング

2021年度においては、予め学科にKラーニングへの参加希望を尋ねたところ、実施学科が9学科に拡大した。科目についても3科目から、学科の希望に応じて理科・社会が加わり、3~5科目となった。

ただし、コロナ禍により、2021年度入学者に対するスクーリングは実施されなかった。代替的な措置として、入学前学習を所管する総合教育センター長による挨拶の動画と、Kラーニングの操作について説明する動画を、大学ホームページ上に掲載するにとどまった。

3. 2022年度入学者を対象としたKラーニング

3.1 対象の拡大

Kラーニングは入学者、あるいは入学者を受け入れる学科から、概ね好評を得てきた。従来の評価を受けて、2022年度入学者より対象が大幅に拡大されることになった。

本学においては、2021年度は9学科であったが、全17学科を対象とすることになった。これにともない、英語・国語・情報の入学前学習が廃され、基礎的な学力の向上を図る e-learning としてのKラーニングと、学科独自の入学前学習「Dラーニング」の2つに入学前学習が再編された。

また、本学のみならず、川崎医療短期大学、専門学校川崎リハビリテーション学院でも、入学前学習としてKラーニングが利用されることになった。

科目は英語・国語・数学の3科目が基本だが、学科の希望に応じて理科・社会についても扱えることとした。これに加えて、「医療福祉基礎」が全入学者に課されるようになった。これはもともと医療短期大学で用いられてきた入学前学習教材である。数学・物理・化学・生物の4科目からなるが、より医療福祉を念頭に置いたものである。たとえば、数学においては脈拍数やBMI [Body Mass Index] の計算が取り入れていることや、生物においては人体の構造に重きが置かれることに、その意図が垣間見える。Kラーニングに組み入れるにあたっては教材

を電子化し、それぞれを専門とする医療福祉大学の教員がヒントと解説を作成した。

3.2 Kラーニングに伴うスクーリング

3.2.1 「ウォーミングアップミーティング」

2022年度入学者を対象としたKラーニングのスクーリングは、コロナ禍のため対面形式では実施が困難な状況であった。しかし、コロナ禍における教育実践の蓄積から、2021年度同様に実施を断念するのではなく、オンライン形式のスクーリングとして計画し実施した。名付けて「ウォーミングアップミーティング」である。

当初は「オンライン説明会」と無味乾燥な名称であったが、Kラーニング実施チームの教員から提案があり、このように名付けられることになった。

「入学식을キックオフとすると、スクーリングと入学前学習はその前のウォーミングアップ段階であること」「高校生らにも、それくらいの気軽さを持って参加して欲しい」という意図が込められている。

なお、ウォーミングアップミーティングは第1回を2021年11月20日に、第2回を12月18日に開催した。第1回は総合型選抜入試の合格者を、第2回は学校推薦型選抜前期入試の合格者を対象とし、合格した時期がそれぞれ異なるためである。両日とも午前10時からのリアルタイム参加を推奨したが、ライブ配信を収録した動画も入学前学習ページに用意し、後日、あるいは繰り返しの視聴ができるようにした。

3.2.2 配信内容

以下のプログラムを配信した。演者は各13分と限られた持ち時間の中で、説明を行った。

2.3で述べた、2020年度のスクーリングと大きく異なるのは「医学」の追加である。入学前学習は単に高等学校までの学習を復習するだけではなく、入学後のモチベーションを高める効果も期待される。ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室の調査⁴⁾では、大学が考える入学前学習のねらいについて、「入学までの学習習慣の維持」「基礎学力の補強・向上」に続き、「大学での学びの動機づけ」があることを報告している。

半澤⁵⁾は「学業に対して意味を見出している学生とそうではない学生との間では、その相互交流の過程の中でリアリティショックを経験する程度に違いが生じる可能性」があることを指摘している。医療福祉という高等学校までは馴染みが薄かった分野を専門とするにあたり、何をどのように準備すればよいか、現場の医師として働く教員からも話を聞くことは、入学後の学びを支えるのに必要なものであると考えた。

表2 2022年度入学者を対象としたスクーリングのスケジュール

時間	内容
10:00～10:10	オープニング, アイスブレイク, 開会挨拶
11:00～10:23	英語
10:23～10:36	医学
10:36～10:49	日本語
10:49～11:02	情報
11:02～11:15	学習の仕方
11:15～11:27	質問対応
11:27～11:30	エンディング

3.2.3 配信方法

配信方法には、YouTube ライブを採用した。費用面で利用しやすかったことに加え、入学者の多くが YouTube に馴染みがあり、事前に説明をしなくても操作に支障が出ないと考えたためである。事実、モバイル社会研究所⁶⁾によれば、無料動画サービスの認知率において YouTube は96.2%と広く認知され、利用率も65.2%であることが示されている。

また、YouTube ライブではチャット機能が用意されていることも勘案した。ライブ配信とはいえ動画を配信するばかりでは、語り手と聞き手の双方向性が損なわれてしまう。それを緩和すべく、聞き手には疑問に感じたことなどをチャットに書き込むよう指導した。

チャットによる、いわゆる「荒し」行為や「炎上」もわずかな可能性として懸念されたが、NGワードとして想定される表現が、実際のチャットには反映されないことを、テスト配信時に確認した。

3.2.4 機材・人材

YouTube ライブの配信は「K ラーニングサポートセンター」のアカウントを新設して行った。新設であるため、チャンネル登録者は当然、多くない。それもあり、配信はエンコード配信形式で行った。Mac Book Pro に、エンコードである Open Broadcaster Software Studio をインストールし、そこにカメラ、コンデンサーマイク、スライド用の Windows ノートパソコンを各1台接続した。また、演者用の照明として LED リングライトを設置した。これらはいずれも教員の私物を持ち寄ったものである。配信と録画を同時に行うには、大学で研究用に支給されるパソコン (Windows11 / CPU Core i5 / メモリ8GB) ではスペックに不安があり、実際に配信テスト時に配信画面が止まってしまう事態が生じた。そのため、K ラーニング実施チームの教員が所有する、映像配信に必要なスペックを擁するパソコン (Mac Book Pro / CPU 2.9GHz クアッドコ

ア Core i7 / メモリ16GB) を利用することとした。

また、配信パソコンは万が一の事態に備え、Open Broadcaster Software Studio をインストールした Mac Book Pro をもう1台用意した。ただ、幸いにして、実際に使うことはなかった。

配信用パソコンは、演者の様子を確認しながら、K ラーニング実施チームの教員1名が配信者 (クリエーター) として演台の近くで操作した。また、この隣では、別の教員が配信を確認しながら、モデレーターとしてチャット閲覧・書き込み用のパソコンを操作した。モデレーターとはチャンネルの運営者に指定されたユーザーで、コメントの管理や削除をする権限を持つ。モデレーターの書き込みは他のユーザーとは異なり、ユーザー名が青字で表示され、ユーザー名の横にはスパナマークが付される。必要に応じて、チャットの書き込みに適宜モデレーターが反応することで、視聴する入学者も話を聞くばかりの状態では放置されていないことを意図した。

配信者・モデレーターの後ろでは、タイムキーパーが進行を補助した。この際もスマートフォンとイヤホンで配信を確認しながら行った。演台で演者が語るのと、それが配信されるのでは30秒以上の時間差がある。両者に目をやることに難しさを感じた。

また、演者の他に、司会を立てた。配信開始時の趣旨説明や、入れ替わり時に演者の簡単なプロフィールを紹介するなどした。

演者を含めれば、これだけで10名の教員が配信に関わったことになる。実際にはこれに加えて、配信に関する問い合わせに備えて総合教育センター職員が控え、また教務課職員も別の場所で配信を確認していた。様々な教職員の支えがあって、ウォーミングアップミーティングの配信が行われた。

3.2.5 演者の難しさ

コロナ禍にあっては授業形式の変更を余儀なくされた。そのため、多くの教職員はライブ配信や授業の収録には一定の経験を持つ。Zoom などの少人数

ライブ配信の場合は視聴者にも顔を出してもらうことで、その反応を確かめながら話すことができる。しかし、今回のYouTubeライブは当初参加人数が見込めず、かつ視聴者の姿は配信側からは確認できない。

このような諸事情により、演者は虚空を見つめて語らざるを得ず、若干話しくさを感じたようである。また、今回のウォーミングアップミーティングは記念講堂のステージ上から配信を行った。そのため、本来多数の聴衆を前に話をするに慣れている演者は、誰もいないにも関わらず講堂の客席を見渡すようにして話した場面も見られた。多数の聴衆に語りかける場合と、インターネット回線の向こう側で情報端末を前にする視聴者に語る場合とでは、やり方が大きく異なることを改めて知ることとなった。この1回目の配信の経験を踏まえ、2回目の配信では、webカメラに付箋を貼り、演者にそこから目を離さないよう依頼することで、視線が大きく動かぬよう改善した。

また、双方向性を重視しようと、視聴者からのチャットをリアルタイムに確認することを考え、演台には配信を確認できるタブレット端末を設置した。しかし、話しながらコメントに目を通すことは難しかった。加えて、先述の通り、実際の語りと配信にはタイムラグも生じた。そのため、演者が話しながらコメントを確認することは、計画倒れとなった。

3.2.6 3施設での連携

3.1で述べたように、今回は3施設合同のスクーリングであった。Kラーニングの実施にあたっては、3施設合同で打ち合わせを繰り返し、想定される問題について調整を行ってきた。今回のスクーリング

についても特段大きな問題が生じたわけではない。ただし、施設によっては英語が授業科目としては実施されていないことや、情報分野について設備や資材の面で説明に齟齬が生じる場面もあった。対象者が幅広いことの難しさを感じることもあった。

4. 入学者からの反応

第1回・第2回とも、ウォーミングアップミーティング終了時に、画面上に2次元コードを表示するとともに、チャット欄でリンクを表示することにより、事後アンケートへの回答を依頼した。以降ではこの事後アンケートへの回答とともに、チャットへの書き込み等も参照しつつ、ウォーミングアップミーティングを振り返る。

4.1 参加者数・アンケート回答者

同時最大視聴者数は、第1回は286人、第2回は167人であった。これはそれぞれ、対象とした入試区分で3施設の入学者の54.1%、63.4%に相当する。

また、アンケートの回答数は、第1回は200通、第2回は129通であった。

4.2 Kラーニングへの理解・意欲

アンケートの「本日のイベントに参加することで、Kラーニングを進めていくことについての理解や意欲が高まりましたか」という問いに対して、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの5段階評価で尋ねた。

入学者が、入学予定の施設に対してネガティブな反応は示しにくいという傾向は念頭に置かなければならない。ただ、入学者のポジティブな反応は得られたことは評価していただろう。これは説明が収録形式でなく、リアルタイムなスクーリングとして行われたことに一因があるのではないと思われる。

表3 Kラーニングへの理解と意欲の促進

	第1回		第2回	
とてもそう思う	147	73.5%	93	72.1%
そう思う	52	26.0%	32	24.8%
どちらともいえない	1	0.5%	4	3.1%
そう思わない	0	0.0%	0	0.0%
全くそう思わない	0	0.0%	0	0.0%

表4 リアルタイムで行う意義

	第1回		第2回	
とても感じた	103	52.0%	61	48.8%
感じた	73	36.9%	49	39.2%
どちらともいえない	13	6.6%	13	10.4%
感じなかった	5	2.5%	0	0.0%
全く感じなかった	4	2.0%	2	1.6%

同じく「本日のイベントはリアルタイム形式で行いました。リアルタイムで行うことに意義は感じましたか」という問いに対しても、8割強の入学者が好意的な反応を示している。

自由記述欄にも「入学にあたって、不安が多くあったのですか、今回のオンラインを通じて少し不安が解消されたような気がします。」(ママ)「リアルタイムだからこそたくさん質問に答えていただけ良かったです!」というコメントがあった。リアルタイムであるからこそ、不安を共有し、それを解消するような雰囲気形成されたと思われる。

石原ら⁷⁾は大学通信教育のスクーリングの持つ意味合いが「学習の契機、仲間作りの契機」といった意味合いに変化してきたことを指摘している。大学の通信制課程と一概に比べることはできないが、今回のウォーミングアップミーティングは「学習の契機」として意義のあるものだったといえる。

4.3 チャット機能

アンケートの「本日のイベントでは、チャット機能も用意していました。チャットは使いましたか」という問いに対して、二者択一で尋ねた。

チャットは双方向性を実現する、リアルタイムならではの仕掛けである。しかし、使用しているのはアンケート回答者の3割程度と多くはない。ただし、これはYouTubeにログインしていなければ、チャットに書き込むことができない制約も大きいように思われる。

また、チャットは必ずしも自分が書き込まなくと

も、リアルタイム感を演出する効果としても機能しうるように思う。図1は第1回、図2は第2回のウォーミングアップミーティングでのチャット数の推移と、最もチャット数が多かった時点の配信画面を示したものである。どちらも開始の早い段階にピークを迎えていることがわかる。これはいずれもアイスブレイクとして、司会が視聴している入学者に対して、今どこで参加しているかを尋ね、チャットに書き込むことを促した場面である。県名や都市名、あるいは居室などが書き込まれていた。そして、それに対して司会や演者が反応を示した。これはウォーミングアップミーティングという見も知らぬ機会にあたって、それぞれの参加場所から一体感を演出するのに効果的だったように思う。

また、他の参加者の書き込みが、自分の問題解決に役立ったことも自由回答で示されている。「私たちが疑問に思った点をコメントし、返答していただけることが非常に良かったと感じました。今回私はコメントの方しませんでしたと同じような疑問を持っている方が沢山いらっしまったため質疑応答の際とても役立ちました。」(ママ)という記述は、同じ疑問を他の参加者が示し、それに配信者が対応すれば、問題は解決することが示されている。これは先に引用した石原ら⁷⁾の「仲間作りの契機」に通じるだろう。誰かはわからないが、どこの学科・施設に入学するかも定かではないが、同じ疑問を抱える仲間がいることへの気付きを、チャット機能が演出している。

表5 チャットの使用

	第1回		第2回	
はい	61	30.8%	38	29.9%
いいえ	137	69.2%	89	70.1%

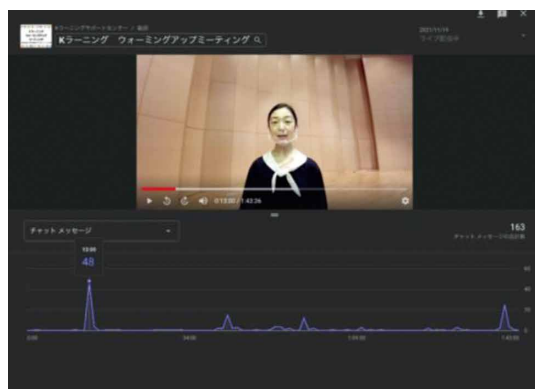


図1 第1回のチャット数の推移と、チャット数が伸びた場面



図2 第2回のチャット数の推移と、チャット数が伸びた場面

表6 今後の改善点

	第1回		第2回	
開催日を変えてほしい	5	2.5%	2	1.6%
開催時間を変えてほしい	8	4.0%	9	7.0%
配信媒体を変えてほしい (youtubeではなく他の配信アプリを使ってほしい)	1	0.5%	1	0.8%
オンラインではなく対面形式で行ってほしい	9	4.5%	6	4.7%
3施設合同ではなく、施設別に行ってほしい	59	29.5%	32	24.8%
入学予定学科の教員に登場してほしい	99	49.5%	67	51.9%
もっと専門に関する話を聞きたい	66	33.0%	25	19.4%
問題の解説等、授業のような形式にしてほしい	25	12.5%	2	1.6%
在学生に登場してほしい	86	43.0%	55	42.6%
入学予定者同士が交流できるようにしてほしい	48	24.0%	17	13.2%

4.4 入学者が感じる改善点

アンケートでは「今後、このようなイベントを行うのにあたって、改善したほうが良いと思ったことがあれば教えてください」という問いも設けた。10個の選択肢を並べ複数回答を認め、かつ「その他」として自由記述も可能としたものである。

第1回・第2回とも目立つのは「入学予定学科の教員に登場してほしい」という要望である。「3施設合同ではなく、施設別に行ってほしい」という回答とともに考えれば、自分の入学先へのピンポイントな興味が示されているとあってよいだろう。

4.3で「同じ疑問を抱える仲間」について述べた。入学者は、高校を卒業して進学を控えている段階が大多数であることを考えれば、現段階で共通項を持つ。しかし、この先はそれぞれの専門へと分化していく。本学だけをとりても医療福祉を共通項に、5学部17学科にも細分化している。「高校の生物が苦手な貴学で勉強についていけるか少し不安です。」等、自由記述では大学での学びに不安を感じている回答も目立った。

合格し、入学は決まったが、自分は入学後に学科の学びについていけるのか、ついていくためにはどうすればいいのか。そのような不安を解消させるためには、基礎的・汎用的な学びの話にとどまらず、学科の教員が登場し、専門的な学びのイメージを具体的に持たせることが欠かせないのではないかと思われる。

5. 考察

本稿では、川崎医療福祉大学の e-learning 型入学

前学習「Kラーニング」のオンラインスクーリング「ウォーミングアップミーティング」について述べ、事後アンケートを基にその効果を論じた。参加した入学者からは、概ね高い評価を得られた。オンラインでスクーリングを実施することは初めての試みであったが、コロナ禍にあつての教育経験の蓄積もあり、実施はスムーズにできたように思う。

また、川崎医療福祉大学のみならず、川崎医療短期大学・専門学校川崎リハビリテーション学院との3施設合同スクーリングであったが、この点についても円滑な実施が行われたと思われる。オンライン形式かつ3施設合同と、幅広い対象者を取り扱った点は評価できる。

ただ、今回実施したスクーリングに必ずしも満足してよいものでもない。先述の通り、入学者は、入学予定学科の教員の話を知りたいと望んでいる。高大接続については盛んに議論される場所だが、多くの場合、中等教育を終えようとしている入学者が、高等教育の学びに期待と不安を抱えるのは当然のことである。入学前という不安と期待が高まる時期に、スクーリングは「学習の契機」として実施される以上、入学者のモチベーションを上げるようなものに改善していかなければならない。そのためには、基礎的・汎用的な内容ももちろんだが、それにとどまらず、入学後の専門的な学びをイメージさせるように内容も工夫していく必要がある。

今回の事後アンケートでは、自由記述に様々な回答が得られた。入学者がどのような期待と不安を抱き、それをどう学習に生かすことができるのか、今後の検討課題としたい。

倫理的配慮・謝辞

本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て行われた（承認番号21-076）。また、川崎医療福祉大学令和4年度医療福祉研究費の助成を受けている。記して謝意を表す。

文 献

- 1) 文部科学省：大学審議会「大学入試の改善について」（答申）抜粋. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryo/attach/1335667.htm, 2000. (2022.9.7確認)
- 2) 椋本洋, 谷川裕稔：入学前教育. 日本リメディアル教育学会編, 大学における学修支援への挑戦—リメディアル教育の現状と課題—, ナカニシヤ出版, 京都, 75-84, 2012.
- 3) 文部科学省：中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ」（審議まとめ）. https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm, 2012. (2022.9.7確認)
- 4) ベネッセ教育総合研究所：高大接続に関する調査. <https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=4338>, 2014. (2022.9.7確認)
- 5) 半澤礼之：大学生における「学業に対するリアリティショック」尺度の形成. キャリア教育研究, 25, 15-24, 2007.
- 6) モバイル社会研究所：YouTube 認知率96.2% 利用率6割超え—男性10代の投稿率は約2割だが全体では約4%—.
<https://www.moba-ken.jp/project/service/20220523.html>, 2022. (2022.9.7確認)
- 7) 石原朗子, 小林健太郎, 鈴木克夫：大学通信教育のスクーリング実施の変化とその要因に関する考察—大規模文系大学 A 大学の事例をもとに—. 佛教大学総合研究所共同研究成果報告論文集, 2, 65-80, 2016.

(2022年11月21日受理)

Implementation and Effectiveness of Online Schooling in Pre-Entrance Learning

Yasuaki KUNIHURO, Yoshimasa OAIRA, Ai NISHIWAKI, Yukiko FUKUI,
Tomomi MONRI, Yasuhiro FUKUSHIMA and Takeshi MIYAKAWA

(Accepted Nov. 21, 2022)

Key words : high school students, pre-entrance learning, schooling, online, interactivity

Abstract

Kawasaki University of Medical Welfare offers an e-learning type pre-entrance learning “K-Learning” for incoming students. In conjunction with this e-learning, an online schooling named “Warming-up Meeting” was held for students who entered the university in 2022. This was the first attempt to conduct online schooling at the university, but it was well received by the participants who enrolled. The reason for this was that it was conducted in real time and the online chat system ensured interactivity. However, many of the participants expressed their wish for the appearance of faculty members from the departments they plan to enter. The challenge for future pre-entry studies is how to provide students with an image of specialized studies after they enter university, while dealing with basic and general contents as a pre-entry study.

Correspondence to : Yasuaki KUNIHURO

Comprehensive Education Center

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : kunihuro@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.2, 2023 483–490)